花と太陽

薬師慈　圭

まあるい森のまんなかで、まあるい花が咲きました。かたいかたい2つのつぼみの、一番上のつぼみが、ぷん、とはじけました。背中に柔らかな太陽の光を浴びて、すっとのびやかに咲いたのです。それぞれのつぼみの横にはかわいらしい葉っぱがうれしそうに揺れていました。

花はあまりにまぶしいので、まじまじとそのお顔はのぞき込んだことはないけれど、たっぷりとしたエネルギーを抱いて、太陽がすぐそばにいることに気がつきました。

花は太陽に照らされて、長い間咲くのを忘れていたことさえ忘れて、次々に花びらを広げ始めました。鮮やかなピンクに彩られた花びらをそっと広げてみると、自分の花びらの一つ一つがまだまだ美しく色あせることなくそこにあることに驚いたのです。それは、一粒の露にうつって、きらきらと輝きました。

まるで宝石を身にまとっているようで、花はうれしくなって花びらを震わせました。

茎はあまりに細く、花を支えるには弱々しく見えましたが、花は背筋を伸ばす気分でどこまでもぴんと立っていたいと思ったのでした。

背中から浴びる光は、花が経験したことのない温かさで花全体を包み込んでいます。幸せだと花は思いました。うっとりとして甘い香りに酔うように花びらを時折揺らしてみるのでした。

おじょうさん、おはよう。

青い風が、葉っぱの肩をそっとたたきました。

おじょうさん、こっちむいて。

白い小鳥が、ひらりと飛んできて、花びらのほっぺたにキスしていきました。

おーい、おじょうさん、ごきげんいかが？

黒いアリが3匹、地面からぴょんぴょん飛んで話しかけます。

花はうきうきと楽しくなって歌い始めました。

ラララ〜ララララ〜

歌に合わせていくつもの金色の音符が空に舞い上がっていきます。それは金色のシャボン玉のようにふわふわと空に近づき、ポンポンとリズムに合わせてはじけるのでした。

すると、近くの大きな木々たちが、さわさわと枝を揺らし、伴奏をはじめました。

リスが枝の上でしっぽを振って踊ります。

モグラが寝ぼけまなこで穴から顔を出します。

まあるい森のたくさんの仲間たちが耳を傾け始めました。

あまりにたくさんのセミが合唱した日には、さすがに花はびっくりして、葉っぱでしーっと合図をして静かにさせなくてはなりませんでした。

花は自分の歌声が周りをいい気分にしていることに気がつきました。それならずっとずっと歌っていよう。

ね、いいでしょ、太陽さん。

太陽は何も言わずにただただ温かく輝いています。花はいつまでもいつまでも楽しげに歌い続けるのでした。

でも、ある日、花は太陽の少し元気がないことに気がつきました。本当にきれいなオレンジ色なのですが、ちっともまぶしくないのです。心配して声をかけてみたのですが、遠くて花の声は太陽まで届きません。

そのうち太陽は花の前にその姿を現し、ゆっくりと西へと沈み始めました。

いつも背中の方に感じていた太陽の姿を花は初めて目の前で見たのでした。

よく見ると太陽は大きなまん丸ではなく、楕円形のような形をしていました。オレンジ色の横になった卵のようです。

ゆらゆらと温かな光を注いではいましたが、明らかに太陽は沈もうとしていました。静かに静かに下に向かって降りてきたのです。それまで一度も沈むのを見たことがなかった花はびっくりしてこう尋ねました。

待って。太陽さん、どこにいくの？

私、まだ光を浴びていたい。

ねえ、お願い、こっちにきてちょうだい。

ねえ、太陽さん、太陽さん。

でも、太陽は一言も発することなくゆっくりゆっくり下りてきて、ついに地平線の向こうへ沈んでいってしまったのです。

最後の光はそれはそれは明るい一本の矢のように空を指さし、それさえもとうとう見えなくなってしまったとたん、あたりは一面闇に包まれたのでした。

花にとって初めての暗く長い夜が始まりました。
花は夜というものを知りませんでした。
花は眠ることが出来なくなり、よけいに長い夜になってしまいました。暗闇の中で、花は初めて怖いと思ったのです。
いえいえ、実は真っ暗ということはありませんでした。夜空には月が輝き、無数の星が瞬いたりしていたのです。月も星も花にやさしくあれこれと花に語りかけ、時には心安らぐ夜になりました。
きょうは空気が冷たいね。
流れ星を数えてごらんよ、時間がたつのを忘れてしまうよ。
三日月は嫌いかい？見ていて、また、まん丸に戻るよ。
お嬢さんは小さいけれど、とても素敵な花だね。
けれど花にとっては、あたりが暗すぎて自分の姿がちっとも見えませんでした。泊まりに来る虫たちに、今私は何色に見える？ときいてみるのですが、虫たちは口を揃えて、ごめんね、可愛い花だけど夜だから色までよく見えないや、と答えるのでした。
花はがっかりしてしまって、とても歌を歌う気持ちになれませんでした。静かなメロディを口ずさもうと思うけれど、何も心にうかんでは来ないのでした。
何日も何日も夜が続きました。月や星が見える日はまだよかったのですが、時には雨が降ったりもしました。
激しい雨が勢いよく上から落ちてくる日には、花は葉をばっと広げて頭にかざして自分の身を守りました。雨が止んで葉を降ろすと表面がぎざぎざに傷ついてしまっていたけれど。
ある日、嵐が来ました。あっという間に花の周りからぱあっと誰もいなくなりました。みんなどこかに隠れて身を守っているのです。花は一人ぼっちになりました。近くの木々もみんな自分のことで精いっぱいです。誰も何もしゃべらなくなりました。嵐はなかなか止みません。地面から小石や砂が撒きあがって花びらにぴちぴちとあたります。
こわいよ。
痛いよ。
誰も何も答えてはくれません。
寂しくて悲しくて花は何度も露をこぼしました。
葉を広げたり降ろしたりして、いったいどれくらいの月日がたったのでしょう。
うつらうつらしていてふと顔をあげると、トンボがちょこんと葉っ

ぱにとまっていました。
もう秋なのかしら。
それは不思議なトンボでした。
全身銀色をしていて、しっぽにはダイヤのような斑点があり、きらりきらりと光っています。暗闇でもしっぽの動きがくっきりとわかるくらいです。
花は勇気を出して話しかけてみました。
トンボさん、嵐は止んだの？
うん、止んだみたいだね。
静かだね。
うん、静かだね。
世界が止まったみたいだ。
そうだね、止まったみたいだ。
太陽さんはどこにいっちゃったのかしらね。
どこだろうね。しばらく会ってないね。
私ね、葉っぱを持ち上げることができなくなっちゃった。
トンボは驚いて葉の下をのぞきこんでみました。
どうしたの？元気出ないの？
うん、全然元気が出ないの。
ねえ、ひとつつぼみがついてるよ。がんばって葉っぱを動かしてみてよ。
うーん、うーん、…駄目ね。もう自分の力で持ち上がらないの。茎も曲がってきちゃったみたい。
トンボはあわてて近くの風を呼び止めました。気ままに吹いていた茶色の風がふり向いてこっちにやってきました。
どうした、どうした？　よし、おれが下から吹いてやるよ。ほら。
心地よい風が、ふわっと頬をなでていきます。
ああ、ありがとう。とっても気持ちいい。感謝します。
トンボは心配そうに花の周りをぐるぐると旋回しています。
なんだか眠い。眠ってしまいたい。
おいおい、寝ちゃだめだよ。
がんばって、身体起こしなよ。
トンボは花の肩に止まり、大きな目で花を見つめました。
君の歌を聴きに来たんだ。一度聴いてみてってみんながいうから。
みんなって？
ここで生きてるみんなだよ。

花はうれしくなって、少しだけ葉を揺らしてみました。けれども葉はちっとも動きません。

ねえ、太陽さんはどこにいるのかな。

トンボと茶色い風は顔を見合わせてしばらく考え込んでいましたが、やがてこういいました。

きっとたくさん照らさないといけないものがあるんだよ。

きっとね、たくさん照らしたいものがあるんだよ。

だって太陽だもの。

そうだ。太陽だものね。

みんな太陽に逢わないとうまく生きていかれないんだ。

みんなだって太陽に逢いたいんだ。

地平線の向こう側にも誰かが待ってるよ。

きっと待ってるんだよ。

花ははっとして思いました。花は太陽にずっとそばにいてほしかったけれど、そうだ、みんなの太陽だもの。みんな太陽を待っているんだもの。一人占めしてはいけない。ずっと私を照らしてって思ってはいけないんだ。

そうね。太陽だものね。

花は暗闇の中でこくんとうなずきました。

それよりつぼみ咲かせようよ。かわいいかわいいつぼみだよ。何色かは見えないけれど。

そうね、見たいけれど、でも光が届かないでしょう。だから、どうしても元気がでないの。

トンボと風は顔を見合わせて、困ったようにそのまま黙ってしまいました。それでも心地よく風は吹き続け、トンボはかすかな旋回音を奏で続けています。

うつむいた花から花びらが一枚そっと離れていきました。

さようなら。またね。

またどこかで歌いましょうね。

その花びらが地面に落ちる前に慌てて風がすうっとどこかに運んでいきました。すこしかるくなった花はトンボに言いました。

トンボさん、ありがとう。そばにいてくれて。でも、残念だけども歌えないと思う。だから、いつでも好きなところに飛んで行ってね。

トンボはしばらく花の周りを旋回し、ふうっとため息をついて言いました。

本当にみんな君の歌が素敵だって言ってたんだ。また、会おうね。

その時は歌を聞かせてね。きっとだよ。

トンボは何度も何度も振り向きながら遠ざかり、やがて、とうとう見えなくなってしまいました。

たくさんの時間が過ぎていったころ、ふと、背中になつかしい柔らかな温かさを感じ、花はちょっと首を傾げてみました。果たしてそこに太陽が顔をのぞかせていたのです。以前よりひとまわり小さくなってはいたけれど。確かに東の空の下から、ゆっくりゆっくりゆらゆらゆら昇ってきたのでした。

それはもうオレンジ色ではなくて薄い黄色の太陽でした。楕円形からさらに平たくなって、まるで一枚のお皿のようでした。

いつもまぶしすぎて見つめたことのなかった太陽は静かにやさしく微笑んでいました。

こんなにやさしいお顔をしていたことに花ははじめて気がついたのでした。そして、すっかり疲れていることにも。

花はもう一度太陽を見つめてみました。まぶしすぎる太陽よりもそれはそれは美しく、花はしばらくうっとりと見とれてしまいました。

太陽さん、また、会えてよかった。

いつもいつも太陽に照らしてほしかった花は、はじめて太陽のことを考えたのでした。

ねえ、太陽さん。また、ここに来るまできっと大変だったのでしょう。たくさんたくさんいろんなものを照らしてきたのでしょう。そして、またここに来てくれたのですね。

そして同時に、太陽がまたすぐに沈んでいくことも感じていました。

ありがとう、太陽さん。

ピンク色の私が見えますか。

もう、声は出ないけれど心の中で今歌っています。とても幸せな気持ちなの。

今だけこの太陽の温かさを全身に受けとめて、決して忘れないでいよう。そう思ってもう一度太陽にやさしく微笑みかえしたのでした。

太陽は何も言わず平べったいままゆらゆらと上がっていきます。

花は薄れていく意識の中で、折れていく茎を感じながら、葉が一瞬持ち上がった気がしました。そして、その葉の下に見落としてしまいそうなほど小さく淡いピンク色のつぼみが見えたのでした。

つぼみはふあーっとあくびをして少しだけ花びらを広げました。花を見てかわいくにこっと笑いました。

こんにちは、つぼみさん。いつかみんなに歌を歌ってあげて。聴いたらみんな幸せになるんだって。ねえ、素敵でしょう。

花は、にっこり微笑みながら目を閉じました。花びらがまた、一枚ずつ離れていきます。茶色い風がどこからか戻ってきて、花びらを包みました。ふわりふわりと風に運ばれていくとき、ふとかすかな歌が聞こえてきました。

ルルル～ルルルル～。

歌に合わせていくつもの薄紫の音符が空に舞い上がっていきます。それは薄紫の小さな小さなシャボン玉のようにふわふわと空に近づき、耳を澄まさないと聞こえないほどのポン、というかすかな音でリズムに合わせてはじけるのでした。

つぼみはきょとんとして顔をあげました。そして、もう少しだけ花びらを広げると、かすかなその歌に合わせて、おもいきって歌ってみることにしました。

リラリラ～リリリリ～。

すると、近くの大きな木々たちが、さわさわと枝を揺らし、伴奏をはじめました。

コオロギが羽を震わせます。

空を飛んでいた鳥たちが、次々に枝にとまりにやって来ました。

また、まあるい森のたくさんの仲間たちが耳を傾け始めたのです。

いつのまにか戻ってきたトンボがゆっくりと旋回しはじめました。

つぼみは自分の歌声が周りをいい気分にしていることに気がつきました。それならずっとずっと歌っていよう。

小さくて優しいその歌声は、薄紫の音符がやがて見えなくなったあとも、いつまでもいつまでもまあるい森に響いていくのでした。

Copyright © 2015 薬師慈圭. All Right Reserved.